

# ザンジバルは植民地だったのか

## — 東アフリカ統治をめぐるオマーン人の歴史認識 —

大川 真由子

### I はじめに — 人類学における帝国研究

歴史上にはさまざまな帝国が存在する。近年帝国史研究を銘打った研究が数多く出版されているが、そのなかに「オマーン帝国」という名称を見つけることはまずない。だが、現在は中東、アラビア半島の南東部に位置する小国オマーン<sup>1)</sup>が、実は18世紀から19世紀末にかけて対岸のイランやパキスタンの一部から東アフリカ沿岸部にかけて広大な領土をもつ「帝国」<sup>2)</sup>で、東アフリカの島ザンジバル<sup>3)</sup>が帝都だったことはほとんど知られていない。本稿は、この帝国内部を移動していたオマーン人がオマーンによる東アフリカ統治をどのように認識しているのかを、1990年代末から出版されるようになった彼らの自伝やザンジバルの歴史書、さらには筆者がおこなったインタビュー資料から明らかにすることを目的にしている<sup>4)</sup>。

これまで帝国に関する研究はもっぱら歴史学の分野でおこなわれてきた。歴史学においては、政治経済問題が主要な関心であった従来の帝国史に対し、昨今のポストコロニアル論を受け、支配者ばかりか被支配者にも影響を及ぼす文化的問題（教育、言語、アイデンティティなど）にも関心を寄せる「新しい帝国史」研究が登場している〔平田 2005〕。その特徴は、本国と帝国を別々の領域とみなすという考え方の再構築である。たとえば、イギリスの歴史家D・キャナダインは、イギリス人行政官が帝国を「一つの相互に結ばれた広大な世界」とみなし、本国のイギリス社会に倣って、すなわち人種ではなく階級という差異に注目して現地社会を階層化したと主張する。彼らは、帝国をイギリス社会のレプリカとしてとらえ、叙勲制度や戴冠式など本国の装飾的な道具を植民地に輸出して帝国に自分たちが見慣れた社会を作ろうとしたというのである〔キャナダイン 2004〕。本国は植民地に対して他者性の創造にばかり関心をもっていたわけではなく、親近性の構築にも関心をもっていたことを明らかにしたという意味では、オリエンタリズム批判にもつながるといえよう。

これに対し、人類学では帝国が主要な研究主題とされてこなかった〔菊地 2003〕。人類学ではむしろ植民地研究として、植民地主義を現地人の視点から考察するスタンスがとられてきた。そこでは支配・抑圧・中心／被支配・抵抗・周辺という二項対立的図式が再考されたことは成果として評価できるが〔e.g. 栗本・井野瀬 1999 ほか〕、これまで人類学が注目してきたのはおもに被植民者であり、植民者（支配者）が問題化されることはさほど多くはなかった。

こうしたなか、人類学者のA・L・スローラーと歴史学者のF・クーパーが、本国／植民地、支配者／被支配者をひとつの分析領域、すなわち帝国という広い枠組で扱うことを提唱した〔Stoler & Cooper 1998〕。支配者側に焦点を当て、「植民者＝経済的優位にある支配者」という従来の歴史学の前提に対して、支配と

被支配の境界領域の脆弱性、不安定性が指摘されるようになってきた。蘭領東インドのオランダ人を研究しているストーリーは、長期滞在にとまなう混血から困窮白人など従来の研究から取りこばされてきた人びとの存在に注目し、支配者とされた階層内部における差異や多様性への配慮を促したのである [ストーリー 2010]。

本稿で扱うオマーン帝国内を移動した人びとに対しても同様のことがいえる。彼らの場合、入植先のザンジバルでは一時期支配者層に属していたが、1890年にザンジバルがイギリスの間接統治下に入った後は支配される側に転じたという希有な経験をもっているため、単純な二元論で理解できない [大川 2010]。

一般的にオマーンや東アフリカの歴史研究において影響力のあるイギリス人研究者およびアフリカ探検家による著作には、オマーンを本国、ザンジバルを植民地として描写し、オマーン人 (=アラブ人) がアフリカ人を支配し、ときには奴隷交易によって搾取したというような記述が多くみられる [e.g. Coupland 1937; Burton 1872]<sup>9)</sup>。最近の研究書は、英語およびフランス語の公文書、古文書、現在も東アフリカに在留するオマーン移民たちのインタビュー資料などを幅広く用いて書かれているが、20世紀前半の諸著作は、研究書であれ旅行記であれ、ヨーロッパの奴隷制観にもとづき、しばしば「抑圧者」であるアラブ人の残虐性を強調していた。現在となつては、こうした著作は「イギリス帝国主義的」記述として批判されているが、世間一般 (とくにヨーロッパやアフリカ) の歴史認識に与えてきた影響は大きい。

これに対し、オマーンから東アフリカに移住した経験をもつオマーン人による著作や語りからみえてくるのは、それとは異なる様相である。もちろん、ひとつの歴史的事象をめぐる複数の認識が存在することはしばしば起こりうる。結論めいたことをいえば、彼らの言説には、東アフリカ (ザンジバル) というコンテキストにおけるオマーン人 (アラブ人) 対アフリカ人という当事者間の対話や暴力だけではなく、イギリスの植民地主義という別の強力な外部の力も作用していることが特徴である。本稿はこれまで人類学において焦点を当てられてこなかった「支配者」の視点から——あるいはそもそも「支配者」として描写されてきたこと自体が妥当なのかという問題も含めて——東アフリカの歴史を見返すことで、人類学における帝国研究あるいは帝国史研究に興味深い事例を提示できると考える。

以下では、まず東アフリカにおけるオマーン統治の歴史を概観したうえで、1970年以降、脱植民地化の過程のなかで東アフリカ各地からオマーンに引き揚げて来た人びとによる著作や語りを紹介する。そこからみえてくる彼らの主張点を整理し、語りの位置性や認識の背景を考察してみたい。

## II 東アフリカとオマーンの歴史的関係

本章では、東アフリカとオマーンの歴史的関係について、オマーン人の移動を中心に論旨に関係のある範囲で記述する。

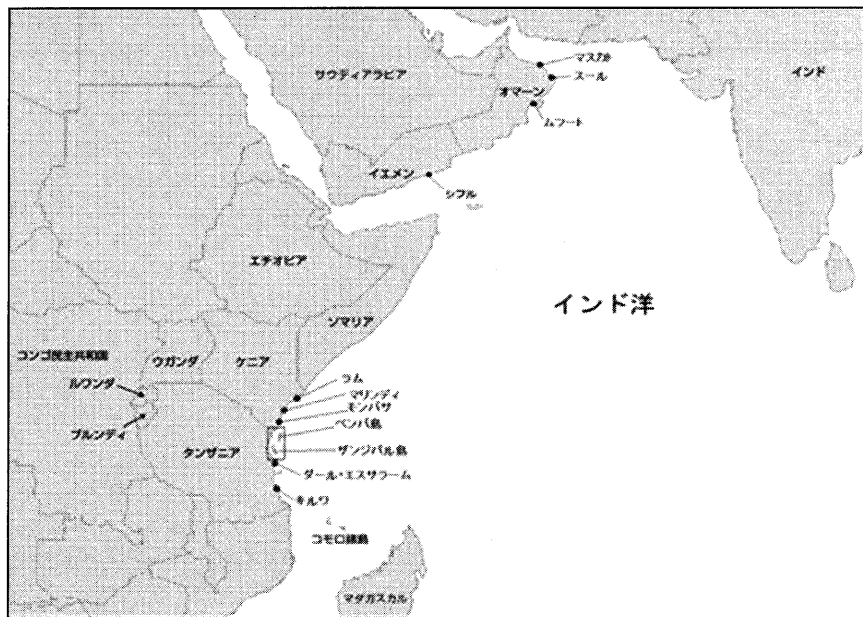
### 1 オマーン統治期 (17世紀末-1890年)

東アフリカ、アラビア半島、インド亜大陸をつなぐインド洋では、2000年以上前から季節風を利用した交易がおこなわれていた。東アフリカでは、8-10世紀にザンジバルや沿岸部の港町に数多くみられるようになったペルシア系、アラブ系の商人と、すでに当地に定住していたバントゥー系諸語を話す人びとの交易の過程でイスラーム化が進行した。それと同時に、長い歴史のなかで住民間の通婚が進み、バント

ウー系言語を基盤にアラビア語などを含むスワヒリ語が生まれた。このように、スワヒリ語を話し、イスラームを信奉する人びとは一般的に——ザンジバルだけではなく、東アフリカ沿岸部一帯で——「スワヒリ」と呼ばれ、沿岸部では彼らによる諸都市が発達する。オマーンの支配下に入る前のザンジバルは島ごとに自律的社会を形成していたが、15 世紀末からポルトガルの支配を受けるようになった。

オマーンの方も 16 世紀初頭からポルトガルの支配下に入っていた。17 世紀半ば、ポルトガルからマスカトを奪回した勢いに乗ったヤーリバ朝オマーンは、ザンジバルからもポルトガル勢力を駆逐した。その後の 50 年間に、東アフリカのスワヒリ諸都市を次々にポルトガルの支配から解放する。1698 年、ヤーリバ朝オマーンがポルトガルの拠点モンバサを押さえて以降、ザンジバル、ペンバ、キルワ、モンバサ、ラムといった主要な港町には、オマーンから総督 (*wāli*) が任命されるようになった。

ヤーリバ朝に続くブーサイド朝の君主も東アフリカの遠征を続けていた。そのなかでも、象牙と奴隷貿易で繁栄していたザンジバルへの関心は強かった。1828 年には現地民とのあいだに盟約を交わした君主サイード (Sa'id ibn Sulṭān) は 1832 年、首都をザンジバルに移し、みずからも移住した。以降、国内の部族間闘争や干ばつに苦しむオマーンからさらに多くの人がザンジバルほか東アフリカ各地に渡るようになった<sup>9)</sup>。サイードの時代オマーンの領土は最大になり、現在のソマリア南部からタンザニア南部に至る沿岸部一帯にまで及んだ。これにともない、オマーン人はアフリカ内陸部へも進出し、19 世紀半ばには、その移動範囲は中央アフリカ (現コンゴ民主共和国) にまで至った。オマーン人は現地民のスワヒリと通婚し、その多くが混血となっていた。



図表 1 インド洋西域地図 (筆者作成)

1856年のサイドの死後、オマーン本土も含めた後継者争いが続き、最終的に1861年イギリスの指導のもとザンジバルとオマーン本土が正式に分断された。その後、イギリスからの圧力で1873年に奴隷貿易が禁止になるとザンジバルは弱体化する。1890年、ついにイギリスはザンジバル島とペンバ島およびその周辺の島々を東アフリカ沿岸部から切り離し、それらを保護領とした。2世紀近くに及ぶオマーン・アラブ人による統治はここで終止符を打った。本稿で扱う「オマーンによる東アフリカ統治」をめぐる言説は、厳密にいうと本節で扱った時期に相当する。しかし、東アフリカ出身のオマーン人が東アフリカ統治について語るときに避けて通れないのが以下で説明するイギリスの存在である。

## 2 イギリス統治期（1890—1963年）

イギリス統治の特徴は、「人種 (race)」による分割統治であった。7年ごとにおこなわれていた人口統計をみると、概してザンジバル住民はアラブ人、アジア人、アフリカ人の順に序列化され、配給や議会の構成員の面など政治経済的に各集団は差別化された。

「アフリカ人」というカテゴリーは、もともとイギリスによって政治的に創られたにすぎなかったが、時間の経過とともに民族集団としての実体性を帯びるようになっていった。たとえばアラブ系政党に対するアフリカ系政党の発足、さらにはアフリカ人がアラブ人を追放するという革命(1964年)の発生などは、アフリカ人とアラブ人が排他的な民族集団となっていたことを意味する。本稿では、イギリス統治期に当局が定義したアフリカ人を「アフリカ人」(カギ括弧つき)と記し、アフリカ人一般(ザンジバル以外のアフリカ人)と区別する。「アフリカ人」はザンジバルにおいてのみ通用した概念で、ザンジバル在住の非ムスリム大陸出身者も含まれる。

イギリスの人種主義的な政策に対し、しだいにアラブ人および「アフリカ人」のあいだに反英感情が芽生え、ザンジバルのナショナリズム運動は、オマーン人が中核を担っていたアラブ協会を中心に1950年代に入って一気に進展した。同時に、民族集団ごとに政党も設立されていった。1955年、オマーン人らによってナショナリストの政策を打ち立てたザンジバル国民党(Zanzibar National Party: ZNP)が創立された。一方で、ZNPをアラブ人支配の政党であると非難し、「アフリカ人」国家の設立を目的としたアフロ・シラジ党(Afro-Shirazi Party: ASP)も設立される。その後の1959年、ASPの前身であるアフロ・シラジ協会から分離していた派閥が、ザンジバル・ペンバ人民党(Zanzibar and Pemba People's Party: ZPPP)を設立する。

1957年、保護領になって初めての選挙ではASPが勝利した。しかし1961年の選挙では、ZPPPと提携したZNPが僅差でASPに勝利した。ASPはアラブ系のZNPの勝利にクレームをつけ再選挙を要求したが、結局同年9月には、ZNPとZPPPから成る連立内閣のもと12月にザンジバルの独立が決定された。そして1963年12月10日、73年間の間接統治の時代に幕を引き、ザンジバルはイギリスから独立を果たしたのだった。

## 3 ザンジバル革命とその後（1964年—）

しかし独立のわずか1か月後の1964年1月12日、「アフリカ人」による革命<sup>7)</sup>が起こった。ウガンダ出身のキリスト教徒ジョン・オケロ<sup>8)</sup>を指導者に、数百人の武装した「アフリカ人」および大陸出身者がこの革命に参加した。ZNP中心の政府は転覆され、代わりにASPの指導者率いる革命議会が創設された。犠牲者数には諸説あるが、この革命によって約1万人のアラブ人が殺害された。歴史家アンソニー・クレイトンによると、1963年にザンジバルにはおよそ5万人のアラブ人がいたということだから[Clayton 1981: 98-99]、約5分の1が殺害されたことになる。

殺害を免れた者も短期・長期にわたり拘束されたり、多くの女性が暴行を受けたほか、アラブ人の家屋や商店、農場が焼き討ちにあった。この革命でオマーン人を含むアラブ人の大半がザンジバルを去り、1964

年末のアラブ人人口は1万2000—1万5000人にまで減少したという〔Clayton 1981: 99〕。当時のオマーンは在外オマーン人の帰国を認めていなかったため、ザンジバルを出たオマーン人は1970年に即位した現スルターンに呼び寄せられるまで国外での不安定な生活を余儀なくされた。こうした東アフリカ出身のオマーン人が1970年代、数万人規模でオマーンに引き揚げてきたのである。

### Ⅲ オマーンの東アフリカ統治をめぐるオマーン人の言説

1970年まで政権の座にあったスルターンによる政策のため、オマーンはほぼ完全に外部世界から切り離されていた。しかし現スルターンが宮廷クーデタで政権を握って以来、石油や天然ガスの輸出による収入を背景に短期間で飛躍的な経済発展を遂げた。この近代化を支えたのが、1970年代に東アフリカ各地から引き揚げてきたオマーン人である。開発が本格化する前の1970年当時、小学校が3校しか存在しなかった国内の状況を考えると、東アフリカで高等教育を受け、英語力に優れた東アフリカ出身者はまさしくエリートであった。

その一方で、この東アフリカ出身のオマーン人の多くがスワヒリとの混血であること、スワヒリ語を話し、オマーンの公用語であるアラビア語の運用能力が十分でないことから、純粋なアラブ人とみなされない傾向にある。そのため、アラブ性を重んじるオマーン社会で「ザンジバリー (*Zinjibārī*: ザンジバル人)」と呼ばれるなど、彼らは一段劣った存在として認識されている。

以上のような社会的状況のなか、1990年代末からこうした東アフリカ出身のオマーン人自身による自伝やザンジバルに関する歴史書の出版活動がさかんになっている〔Al Barwani 1997; Ismaili 1999; al-Kindī 2009; al-Riyānī 2009; Ghassany 2010; Al Busaidi 2013〕<sup>9)</sup>。使われている言語もアラビア語、英語、スワヒリ語と多岐にわたり、このうち3冊は翻訳も出版されている。以下では、近年出版された文献および筆者が聞き取り調査をおこなった東アフリカ出身者の語りのなかから、前章で説明したオマーンによる東アフリカ統治をめぐる言説を紹介する。

#### 1 東アフリカ出身のオマーン人の言説——著作から

まずは、2009年の出版後3か月後には重版となり、2012年には英語版も出版されたナースィル・アル＝リヤーミーの『ザンジバル——人物と出来事 1828–1972年』(*Zinjibār: Shakhṣīyāt wa aḥdāth 1828-1972*)をとりあげる。君主サイドがザンジバルと盟約を結んだ1828年からの1世紀半のあいだに活躍したオマーン人や歴史的な出来事を紹介する内容で、800ページに及ぶ大著である<sup>10)</sup>。筆者は1964年ザンジバル生まれで、現在、オマーンの司法次官補の地位にある。歴史家としての訓練は受けていないものの、丹念な資料検証と64年の革命経験者へのインタビューにもとづいた著作は研究者からも評価されている。1970年にザンジバルを出てオマーンに両親とともに移住したというから、ザンジバルでの記憶はそれほど多くはもっていないだろう。それでも、オマーンとザンジバルのかつての友好的な関係や、ザンジバルにおけるオマーン人の生活について現代のオマーン人があまりにも知らないという問題意識をもっていた。彼は本書出版の動機をこう語っている。

「わたしの目的は、文明や礼節のたいまつをかざして東アフリカ海岸部に栄光をもたらした人びとの大義を弁護することである。(中略) 文明化に大いに貢献したアラブ人自身のあいだでさえ、多く

の者がいけ好かない植民地主義者 (*al-isti'mār al-baghīḍa*) がつむいだ嘘八百の話を受け入れてしまっている。(中略) わたしは断片化した出来事を記録し、歪曲、混乱、虚偽のない形で後世に伝えたいのだ」[*al-Riyāmi* 2009 : 2] <sup>11)</sup>。

さらには「ヨーロッパ人の旅行家や宣教師らが東アフリカのアラブ人について多くの記録や記述を残していることは認めるが、その多くが不純な目的をもち、イスラームやアラブ性 (*al-'urūba*) に対する偏見を抱いている」(3) と、そのゆがめられたアラブ像に対して怒りを隠さない。アラブ人はアフリカ人を搾取る富裕な侵略者というイメージが流布していることは事実だが、アル＝リヤーミーはこう反論している。

「アラブ人全員が支配者層のエリートだとか特権階級、富裕な地主だという非難もあるが、それは神話である。しかも悪意に満ちた神話だ。圧倒的多数は毎日の生活をなんとかやりくりしているような一般市民だった。ポーターや路上のコーヒー売り、小規模な商店主、漁師、さらには粗末な農具で田畑を耕す小農だ。驚くなかれ、下水槽での人糞処理のようなもっとも穢れた仕事もアラブ人がやっていたのだ」(英語版 : 48)。

また、アル＝リヤーミーは、ザンジバルに最初に定住したのはアラブ人であり、おおよそ7世紀末であることを複数の歴史書を引用して説明している。その後、10世紀末にシラジ人(ペルシア系)が、最後にバントゥー系がザンジバルに定住したのだという。現在のザンジバル住民の大半を占めるスワヒリという民族はこの3つの民族の混血といわれているのだが、そのなかでもアラブ人がもっとも早い時期に定住したのだからアラブ人の土地だ、と主張しているのである(6、26-31) <sup>12)</sup>。さらには、19世紀以降のオマーンからザンジバルへの大規模な移民の流れについては「国内移動 (*hijra dākhlīya*)」(40) と定義している。当時、オマーン人にとって祖先が渡った土地に移動することは当然のことになっていたし、スルターン自身もザンジバルを首都と定め、そこに定住していたというのが理由である。

ここには、オマーン人がザンジバルを「征服」したというニュアンスはみじんも読み取れない。むしろ、オマーン人らアラブ人が東アフリカに大量移住することによって、東アフリカには文明がもたらされたというのである。その文明とはすなわちイスラームとアラブ文化である。

「オマーン人 <sup>13)</sup> は東アフリカにおいて誇るべき歴史を作り、その歴史は今日でもはっきりと残っている。加えてオマーン人はイスラームの普及に一役かったという名誉にもある。(中略) 彼らはまたオマーン・アラブ文化の普及にも大きく貢献した。それは現在のザンジバル人のアイデンティティを構成する礎として残っている。オマーン人がやったのだ、たしかに。(中略) 偉大で、記録に値する、賞賛に値する出来事で、次世代に教える歴史書に栄えある1ページを作れたのも努力のたまものである」(293)。

またザンジバル革命についても多くの紙幅を割き、イギリス植民地主義の政策に毒されたアフリカ人が起こしたものであるとし、イギリスを糾弾した書き方となっている。

「アラブ人の同胞に対するアフリカ人の態度を変えた主要要因は何か。親密、調和、融合といった感情が、いかにして深い怨恨や復讐の感情に変わったのか。(中略) アフリカ人の精神を支配していた感情や信念はまったくの事実無根であったこと、『分割統治』という悪名高い戦略を遂行するために植民地主義者が植えた嘘や誤解を与えるような欺瞞の産物でしかなかったということがわか

るだろう」(12)。

アル＝リヤーミーだけではなく、すべての著作に共通しているのは、アラブ人対アフリカ人という対立構図はイギリス統治期に作られたという指摘である<sup>14)</sup>。したがって全般的に、イギリス統治下のアラブ人対アフリカ人の対立に関して、一般的に流布しているイメージに対抗する形で書かれている。

続いて紹介する著作は、ザンジバルの政府高官として活躍し、オマーン人社会を代表するエリートであったアリー・アル＝バルワーニーによる英語の自伝 [Al Barwani 1997] である。彼は 2008 年に亡くなったが、生前から計画されていたアラビア語翻訳が 2011 年に出版された [al-Barwāni 2011]。革命時、ザンジバルの外相だったアル＝バルワーニーは、アラブ系政党 ZNP の創設者でもあったため、革命後は裁判なしに 10 年間投獄されていた。オマーンが東アフリカに進出した契機について、彼は著作において以下のように説明している。

「東アフリカが 2 世紀にわたるポルトガルの抑圧から解放されたのは東アフリカ沿岸・島嶼部の住民から度重なる要請を受けてやってきたオマーン人のおかげであった。これはオマーン人の博愛的態度でもなければ、領土を獲得するための帝国主義的な策略でもなかった。(中略) 東アフリカには数千年ものあいだアラブ人が住んでいて、オマーンに助けを求めてきたのも同じ文化や宗教、そして同じ民族的出自をもつ人びとだった。オマーンを解放して勢いに乗ったからには、東アフリカまで敵を追いかけるのは当然である。そうすれば同胞もみな解放され、インド洋は再び商業と交易が自由な場所になるのだ。(中略) そして東アフリカの人びとたちに自治が可能な状態にしてオマーンに戻った。東アフリカの統治者らは自分の領土にいて無傷だったが、以来、オマーンの指導者に完全な忠誠を誓うようになったのだ」[Al Barwani 1996 : 12]。

オマーンが東アフリカに軍事的に進出したのは、けっしてオマーンの帝国主義的な領土拡大をもくろんだわけではなく、あくまでも現地から要請を受けたからだということを彼は強調している。要請を受けての遠征という書き方はオマーン人による歴史書ではごく一般的な説明である。また、君主サイドの時代に首都がザンジバルに移されたことについて、以下のように述べている。

「ザンジバルは首都になった。海外からの外交団が派遣されるのもザンジバルだったし、サイドはザンジバルから世界各地に使節団を派遣していた。したがってザンジバル、つまり東アフリカはオマーンの植民地ではなく、オマーンの本質的部分であったのだ」[Al Barwani 1996 : 13-14]。

この部分は重要である。というのも、一般的にヨーロッパの文献では「ザンジバルはオマーンの植民地 (colony) だった」とか「オマーンは東アフリカを植民地化あるいは征服 (to colonize/ conquer) した」と記述されることが多いからである。だが、オマーン人の著作のなかにもそうした記述はみあたらないし、見つける可能性はほとんどない。なぜなら彼らはみずからのオマーン統治を「植民地支配」としてとらえていないからである。本件については考察の部分でとりあげたい。これに対して、オマーン統治時代の前後ザンジバルを統治していたポルトガルやイギリスに対しては植民地主義者 (colonialist) 呼ばわりである。

さて、オマーン統治時代の特徴としてよく描かれるのは宗教的寛容性である。ザンジバルは住民の 9 割以上がムスリムであるが、マジョリティのアフリカ系住民がスンナ派であるのに対して、統治者であるオマーン人はイバード派であった。このほかにもインド系 (ヒンドゥー教徒、シーア派イスマール派)、ペルシア系 (シーア派 12 イマーム派)、キリスト教徒などさまざまな宗教、宗派が共存していた。アル＝バルワーニーいわく、ザンジバルでは個人の信仰にかかわらず、みなが預言者ムハンマドの生誕祭やクリ

スマス、あるいは仏陀の誕生日やディーワーリー（ヒンドゥー教の新年の祝い）を祝ったという。

「宗教的寛容はザンジバルの伝統である。1世紀以上も前、君主サイドは、ムスリム住民に対して、ヒンドゥー教徒の居住区での牛の屠殺を禁じた。ヒンドゥー教徒は数的には少なかったが敬意を表してのことだ。結婚、離婚、相続についても自分たちの法に従うことが許されていた。（中略）だが、それは植民地主義者が到来する前までのことであった」[Al Barwani 1996 : 33]。

ここでも、オマーン統治とイギリス統治の断絶・差異が指摘されている。

## 2 東アフリカ出身のオマーン人の言説——語りから

前節で紹介した2人は、ザンジバルのオマーン移民のなかでも有力部族の出身で、ザンジバルの政治にも深く関わり、経済的にも恵まれた地位にいた人あるいはその子孫である。他方、以下では地主といった富裕階級の出身ではなく、小規模な商店主や小農として生計を立てていたオマーン移民やその子孫たちの語りを紹介しよう。

まずはオマーンの国立大学の教員、イブラーヒーム・ヌール・シェリフである。1941年ザンジバルで生まれ、ウガンダのマケレレ・カレッジを卒業した後も90年代後半までアメリカの大学で教鞭を執っていた。彼ももともと芸術家であったが、今では奴隷制やザンジバル革命をみずからの体験にもとづいて語ることできる最後の世代としての意識と責任感をもって評論活動に従事しているのだという。

アル＝バルワーニー同様、彼もポルトガルの統治を「植民者の侵略 (colonial invasion)」と表象し、その残虐性を指摘していた<sup>15)</sup>。16世紀初頭から3世紀にわたるポルトガルの圧政に耐えかね、「オマーン・アラブ人に援助を求め、ポルトガルの支配に終止符を打ったんだ。その見返りとして、オマーンのスルターンはスワヒリ海岸の宗主権を認められた」と述べている [2004/9/21]<sup>16)</sup>。

「ザンジバルのアラブ人は富裕層といわれているが実際はそんなことはない。裕福なのはむしろインド人の方だった」といって、筆者に1冊の本を見せてくれた。同じくザンジバル生まれのオマーン人、イーサー・アル＝イスマーイーリーによる歴史書<sup>17)</sup>に掲載されている12年生のクラス写真 (1955年撮影) を見せながら説明してくれた。

「この写真をみろ。写真の脇に教員や生徒のリストがあるが、生徒はアラブ人が6人、アフリカ人11人、インド人46人。アラブ人は富裕層といわれているがそんなのはごく少数。それ以外はわたしも含めて非常に貧しい状態だったのだよ。わたしの父は石炭売りだった。だからアラブ人がアフリカ人を搾取したというのは神話なのだ」[2004/9/27]。

だが、彼の指摘は若干の外れな部分がある。というのも、アル＝イスマーイーリーが著書のなかで提示した写真は公立学校の写真で、ザンジバルの公立学校は50年代までは無料だったからである。その後世帯収入に応じて7年生以上には学費が課されたが、年間200シリング以下という安価なものだった。しかも、7割の学生が学費免除で支払っていたのは裕福なインド人家庭だけだったというから [al-Riyāmi 2009 : 362-363]、この写真だけをみて一概にアラブ人が学校に行けるほど裕福ではなかったということはできないだろう。アル＝イスマーイーリーがこの写真を掲載したのは、アラブ人の方がアフリカ人よりも教育の機会に恵まれているという一般的認識に対してアラブ人側を弁護するためである [al-Isma'īlī 2012 : 97-99]<sup>18)</sup>。

つぎに紹介するのは、1947年、大陸部タンガニーカに生まれ、東アフリカ出身者には珍しく1960年代末 (現スルターンが呼び寄せる前) にオマーンに移住してきたハマド<sup>19)</sup>である。銀行家を経て、国家監査



委員会および湾岸協力機構最高理事会の諮問機関のメンバーとなったハマドは、2003年、2004年初めてザンジバルを訪問し、見慣れた光景に圧倒されたという。「オマーン人がここにいたことはまちがいない。オマーンの影響という栄光の過去が高くそびえているではないか。これは簡単に消える歴史ではない」[2009/2/12]。オマーンが残したザンジバルの遺産について彼はこう語っている。

「教育、健康管理、クローブやコブラなどの合理的な農業、電気や下水、メディアを18-19世紀に導入したのもすべてブーサイド朝のスルターンたちのおかげなのだ。先見の明があったんだよ。暗黒時代のザンジバルのような場所が地球上にあったとしても、有能な指導者の統率力をもってすれば大いに前進できる。オマーンの指導者らは見識ある存在だった。オマーンが貢献したからザンジバルが成功したのだ。あの頃がザンジバルの栄光の時代だったこと、それは決して忘れてはいけない」[2009/2/19]。

「ザンジバルは帝国の宝石だった。偉大な指導者サイドの墓はそこにある。ザンジバルが今日誇るものの多くは、農業であれ、インフラであれ、文化や言語であれ、ブーサイド朝の命令によるものだ。オマーンの歴史はザンジバルなしには完結しない！」[2009/2/19]。

同様のことは、先にとりあげたアル＝リヤーミーの著作にもみられる。「ザンジバルはかつて東アフリカの政治、文化、経済面で牽引役だった」という。「重要なことは、そうした発展はイギリスの保護領下に入る前に訪れていたということだ。この国が早い段階で文明化し進歩したのもサイドのおかげである」[al-Riyāmī 2009 : 512]。

と、ここでアル＝リヤーミーはスワヒリ語のウスタアラブ (*ustaarabu*) という言葉を援用している。ウスタアラブとはアラビア語起源の言葉で、「アラブ人に同化させる、アラブ人になる、アラブ人の諸慣習を採用する」という意味である。つまりウスタアラブとはアラブ化することを意味し、それがスワヒリ語では文明と同義語として使用されている。19世紀当時、アラブ化することは文明開化につながるという価値観が普及し、現地民はこぞってアラブの文化を身につけた。奴隷や異教徒と差異化するために都市エリートが使用し、そこにはイスラーム的知識や都市性、高い社会的地位や教養が含まれる [Fair 2001 : 43]。

## IV 考察——東アフリカ出身のオマーン人の歴史認識

本章では、前章でとりあげたオマーン統治をめぐるオマーン人の言説を分析してみたい。

### 1 主張点

東アフリカ出身のオマーン人による出版物や語りにみられる主張点は以下の4つにまとめることができる。

第一に、オマーンとヨーロッパによる統治方法の違いの提示である。オマーンが東アフリカに進出したのは現地からの要請によるものだったということを、アル＝リヤーミーやシェリフら多くのオマーン人が強調していた。つまり、政治的支配や領土拡大が目的だったのではなく、ポルトガルから現地を解放するためにオマーンが立ち上がったという解釈である。そしてオマーン統治時代は、人種による分割統治はなく、宗主国の言語（アラビア語）が強要されることもなかった。支配者層はイバード派であったが同じムスリムであるので、イスラームやその聖なる言語であるアラビア語を尊重する価値観は同じであった。

これに対し、イギリスの統治方法は人種主義的な分割統治で、別稿では詳しく述べたが、脱イスラーム、脱アラブ的教育・言語政策が敷かれていた[大川 2011]。オマーン人を中心に現地住民からは大きな反対運動が起こったにもかかわらず、この時代、スワヒリ語の表示がアラビア文字からローマ字に切り替えられ、それまでスワヒリ語の読み書き能力があった人が非識字者になってしまったのだ。

すべての著作および語りのなかで、人種による分割統治というイギリスの政策に批判は集中している。イギリス統治下でアラブ人対アフリカ人という対立構図ができたのは、東アフリカ出身のオマーン人だけではなく、多くのヨーロッパ人の歴史家も指摘していることである。興味深いのは、東アフリカ出身のオマーン人は共通して、用語を使い分けている点である。つまり、彼らはイギリス統治、さらにはオマーン統治以前のポルトガル統治に対しては「植民地主義 (*al-isti'mār* colonialism)」という用語を使うが、オマーン統治に対しては使わないのである。それは彼らがオマーン統治を植民地主義の支配と認識していないことによる。同様の理由で、ヨーロッパ勢に対しては「占領 (*ihtilāl* occupation)」や「征服 (*ghazwa* conquer)」を使い、オマーンに対しては使用しない。アル＝リヤーミーは「憎むべき植民地化 (*al-isti'mār al-baghīda*)」[al-Riyāmī 2009 : 2]と書く一方で、オマーンに対しては単なる「統治 (*hukm* rule)」と表記している。このようにオマーン統治に対置される形でヨーロッパ植民地主義を痛烈に批判することにより、オマーンの統治を暗黙のうちに正当化しているといえよう。

第二は、オマーン統治によってザンジバルに繁栄がもたらされたという考え方である。電気や下水道というインフラ面もさることながら、最大の貢献はイスラームとアラブ文化の普及であると彼らは考えている。実際には、オマーン統治時代より以前にザンジバルはイスラーム化していたのだが、沿岸部と島嶼部だけはイギリス支配を受けてもキリスト教化しなかったし、アラブ・イスラーム文化の浸透は根強かった。ウスタアラブという語に象徴されるように、スワヒリにとってアラブ化することが文明化することであった時代がたしかに存在していたことを考えても、この地におけるアラブ人ムスリムの貢献は考慮されてしかるべきものであろう。ただし、ここでいう「アラブ人ムスリム」にはオマーン人のみならず、現イエメンのハドラマウト出身者が多く含まれることは明記しておかねばならない。いずれにせよ、ザンジバルに文明をもたらしたという「事実」がまた、東アフリカ出身のオマーン人によるオマーン統治の正当化につながるのである。

オマーン人の言説にみられる共通点の第三点目は、オマーン統治は植民地支配でないのだから、ザンジバルはオマーンの植民地ではないという解釈である。アル＝リヤーミーは、オマーンからザンジバルへの人の移動を「国内移動」と解釈していたし[al-Riyāmī 2009 : 40]、アル＝バルワーニーはより直接的に「東アフリカはオマーン植民地ではなく、オマーンの本質的一部分であった」と述べている[Al Barwani 1996 : 13-14]。彼らはオマーン本土だけでなく東アフリカ沿岸部広く一帯をひとつの政治体にとらえ、それを「オマーン帝国 (*al-imbarātūrīya al-'umānīya*)」と表象している。したがって、ザンジバルは「植民地 (*musta'amara*)」ではなく、オマーン帝国の一部だと主張するのである。

最後の点は、オマーン統治時代におけるスワヒリとの共存共栄、友好関係の強調である。イギリス統治時代にアラブ人対アフリカ人の対立が生じたのに対し、その前のオマーン統治時代、両者は友好関係にあったのだという。実際問題として、東アフリカに渡ったオマーン人のほとんどがスワヒリと通婚し、スワヒリ語を話して生活していた。ザンジバルでは、一部の裕福なオマーン人は中心地ストーンタウンに集住していたが、大多数は地方に散在し、スワヒリに囲まれて生活していたことは文献やインタビューからも明らかになっている。アル＝リヤーミーは「親密、調和、融合といった感情が、いかにして深い怨恨や復

警の感情に変わったのか」[al-Riyāmī 2009 : 12]と問うているが、前者はオマーン統治時代で後者がイギリス統治時代に相当する。アル＝バルワーニーの自伝のタイトルも、『ザンジバルにおける紛争と調和』である。かつてのザンジバルの人びとが享受していた調和や団結を示す語 (*hamimīya, tajānis, insihār*/ closeness, harmony, fusion, cohesion) は東アフリカ出身のオマーン人の言説にはしばしば登場した。

## 2 誰に対して語っているのか

1990年代後半以降、アラブ人を悪者として描くヨーロッパ人による歴史叙述を批判する形で東アフリカ出身のオマーン人たちがみずからの言葉でザンジバルの歴史を語りはじめた。それでは、彼らは誰に対して語っているのだろうか。彼らの著作がアラビア語、英語、スワヒリ語で執筆・翻訳されていることを考慮すると広範な読者が想定されうるが、筆者は語る対象は大きく2つあると考えている。ひとつは、すべての著作に明らかなように、著者らは西洋によって作られ、再生産されているアラブ人に対する帝国主義的イメージを払拭すべくペンを執った人びとである。つまり、彼らはこれまで東アフリカの歴史を作り上げ、奴隷商人、あるいはアフリカ人を搾取する悪徳アラブ人ムスリムというイメージが浸透している西洋に向けて語っていると考えられる。

語る対象の2つ目は、国内のオマーン人、とくに東アフリカへの移住経験のないオマーン生まれのオマーン人に対してである。第3章でみたように、アル＝リヤーミーは、この時代に東アフリカで起こった出来事を現代のオマーン人があまりにも知らないという問題意識をもっていた。東アフリカ出身のオマーン人による「歴史修正」の動きがヨーロッパのみならず国内にも向けられている社会背景について以下に論じてみたい。

冒頭でも述べたように、オマーン生まれのオマーン人は東アフリカ出身者（およびその子孫）をアラブ人とみなしておらず、「ザンジバリー」と呼んでいる。彼らを他者とみなすオマーン生まれのオマーン人は、自分たちはアフリカとはまったく関係がない、(国際的にも批判をされかねない) 奴隷交易にも携わっていないと認識しているのである。これに対し東アフリカ出身者は、出生地にかかわらず自分たちを一括して「ザンジバリー」と呼ぶのも、誤った歴史認識にもとづいているからだと主張する。無知あるいは無関心であるオマーン生まれのオマーン人に対して、アフリカでの「歴史」を伝えること、つまり自分たちはオマーンが誇る海洋帝国という歴史の担い手であったことを示すことが、自分たちへの誤解や偏見をなくすひとつの手段であると、一部の東アフリカ出身者は考えているのである。

それでは、統治された側のアフリカに彼らの関心は向いていないのだろうか。本稿で紹介した東アフリカ出身のオマーン人は、アフリカの現地民はイギリスによって洗脳されたと解釈している。最終的に「アフリカ人」によるアラブ人の追放という形になってしまったが、オマーン人の批判の矛先はイギリスの帝国主義に向けられているのであって、アフリカ人には直接向けられていない。むしろイギリス統治時代に作られてしまったアラブ人对アフリカ人のあいだの壁を取り払い、オマーン統治時代のような関係性を取り戻したいと考えている。アル＝リヤーミーの著作の表紙カバー（英語版）には次のように書かれている。「革命とその後、無実のザンジバルの人びとに対しておこなわれた凶悪な犯罪に対する許しと和解を求める。そしてより強固で有望な将来のためにオマーンとザンジバル間の橋を再建しはじめたい」と。

本稿で紹介したオマーン人を含め、年配者にはザンジバルに愛着を感じ、別荘を建てて頻繁に訪れてい

る人びともいる。彼らの著作がアラビア語や英語だけではなくスワヒリ語で書かれていることを考えても、アフリカに対する関心は少なからずあると考えられる。

## V おわりに

以上みてきたように、オマーンとザンジバルの関係は、植民者／現地民あるいは支配（抑圧）／被支配（被抑圧）のなかで理解されてはならず、両者は少なくともオマーン統治時代には友好関係にあったこと、そしてザンジバルはオマーン帝国の一部であったと認識されていることが明らかになった。彼らの語りのなかにはかならずヨーロッパ——オマーン統治前後のポルトガルとイギリス——が登場し、ザンジバル以上の存在感を放っている。彼らにとってのザンジバルは、つねにヨーロッパ統治と対置されるオマーン統治の枠組のなかで認識されているのである。

こうした彼らの執筆活動をこれまでオマーン政府が歓迎してきたわけではない。ひとつには、1970年に現スルターンが実父を宮廷クーデタで倒し、即位した背景にはイギリスの協力があった。したがって、現オマーン政府はおおやけにイギリスを批判することはできないという可能性がある。事実、政府が出版したオマーンの歴史書にはイギリス植民地主義批判はみとれない。彼らはこうした「正史」に満足することなく、独自の活動を展開していると考えられる。

政府が東アフリカ出身のオマーン人の執筆活動を歓迎しない第二の理由は、ザンジバルの歴史を語ることは、国際的な批判の対象にもなりかねない奴隷制へのオマーン人の関与を想起させるということである。東アフリカへの進出や領土拡大はオマーンにとって誇るべき過去の栄光ではあっても、奴隷制への関与は、たとえイスラーム的な奴隷制がヨーロッパのそれと違うことを自負しているとしても、胸を張って語れるような「歴史」ではない。その証拠に、イギリス植民地主義批判と同様、奴隷制に関する記述は政府系の歴史書や学校の歴史教科書には登場しない。つまり、彼らの活動は、本国のナショナル・ヒストリー（正史）の「語り直し」ではなく、ヨーロッパの植民地支配に対するオルタナティブとしてオマーン帝国時代を提示することで、オマーンのナショナル・ヒストリーを代弁・表象しているといえよう。それは同時に東アフリカ出身のオマーン人がオマーンのナショナルな語りのなかに足場を築く運動として位置づけることができる。

こうした論調は、ヨーロッパによる既存の反アラブ・イスラーム的言説に対抗する形で登場したインタラクティブなものであるとはいえ、東アフリカ出身のオマーン人の主張は、典型的な植民地主義正当化論であるという感否めない。だがメディア規制の厳しいオマーンで、1990年代以降、東アフリカに関する著作が急増したことを考えると、帰還後20年以上たつてようやく彼ら自身が語ることが可能になってきたという、国内の風潮に変化の兆しがみえてきたといえよう。

本稿は東アフリカ出身のオマーン人の言説を中心に構成されているが、オマーンとザンジバルの関係性を検討するならば、イギリス植民者や統治された側のアフリカ人らによるオマーン統治に対する認識との対比が必要であることはいうまでもない。オマーンとヨーロッパによる統治方法に違いがあることは、欧米の歴史家のあいだでも一致した見解がみられる [cf. Cooper 1977, Bennett 1986, Pouwels 1987]。付言して

おけば、植民地主義正当化論はイギリス側にもみられる。ザンジバルの都市計画と植民地主義に関する著作のなかで、ウィリアム・ビッセルはオマーン統治時代のザンジバルを近代国家のアンチテーゼ（政府・官僚制度・司法や警察制度のガバナンスの不在やアラブの専制政治）として位置づけることで、イギリスはみずからの統治を正当化していることを指摘している [Bissell 2011 : 68]。

これに対し、アフリカ人にとってアラブ人（オマーン人）は奴隷商人であると同時に、文明の担い手でもあったため、アラブ人に対して相反する感情や言説が存在している。だが、国家（タンザニア）のイデオロギーによって方向づけられたアラブ人批判の風潮が主流となるため、親アラブの言説は若干の例を除いておもてに出ることはない [大川 2010]。ムスリムが多数派を占めるザンジバルと異なり、キリスト教徒が多数派を占めるタンザニア大陸部では、反アラブというよりは対キリスト教としてのイスラーム批判という傾向がある。このようにオマーン統治に対するアフリカ人の言説も一筋縄ではいかない。

またオマーン生まれのオマーン人あるいは現オマーン政府がオマーン統治の歴史をどのように表象しているのかも興味深い点である。オマーンの歴史教科書や政府刊行の歴史書を検証すると、本稿でも紹介した「オマーン帝国」という名称・概念は現代オマーンにおいて創られたということがわかってくる。いつごろ、どのような目的で創られたのかは別稿にゆずりたい。

## 注

- 1) 人口 277 万人（2010 年統計、うち 3 割が外国人）、住民のほとんどがイバード派（穏健派）ムスリムである。民族構成は多数派のアラブ系ほか、パキスタン系、インド系、ペルシア系で、主要言語はアラビア語である。
- 2) 帝国とは何かという本質的問題はここでは問わない。「オマーン帝国 (*al-imbarātūrīya al-'umānīya*)」という名称は現代のオマーン人あるいはオマーン政府が用いているものであり、筆者自身のものではないことを最初にお断りしておく。
- 3) タンザニア沖に浮かぶザンジバル島とペンバ島その他 30 余りから成る島嶼部の名称。1964 年に大陸部タンガニーカと連合し、タンザニアとなった。人口 130 万人（2012 年統計）、住民の多くがスンナ派ムスリムである。民族構成は多数派のスワヒリ（ムスリム）ほか、大陸アフリカ人（非ムスリム）、アラブ系、インド系で、主要言語はスワヒリ語である。
- 4) インタビューはおもにオマーン的首都マスカトにて 2004 年から 2010 年まで断続的におこなわれた。
- 5) オックスフォード大学植民地研究科教授で代表的な歴史家レジナルド・クープランドや西洋の探検家はオマーン人を「植民地主義者 (colonist)」と表象している。なお、奴隷制に関与していたアラブ人に対するヨーロッパの探検家の言説が一枚岩的でなく、当時のイギリスやアフリカの政治的状況の影響を受けていたことは拙稿にて論じた [大川 2008]。
- 6) ヤーアリバ朝時代にもオマーンからの移民がなかったわけではない。ザンジバルにおけるオマーン移民の数は、1770 年代で 300 人、1819 年で 1000 人、1840 年代には 5000 人になったというから、サイードの遷都以降に急増したことがわかる [Sheriff 1995 : 13]。
- 7) オマーン人側はそれが「革命 (*thawra*)」であったとは認識していない。オマーン人の著作や語りのなかでは「転覆」(*inqilāb/upheaval*) がもっともよく使われる用語だが、そのほかにも「侵略」(*i'tidā'*)

invasion) や、「ジェノサイド」とか「民族浄化」(*al-taṣfiya al-‘irqīya/ ethnic cleansing*)という用語も使われている。

- 8) 1937年ウガンダで生まれたオケロは、1959年ペンバ島に渡った。移民当初はZNPに共鳴していたが、ほどなくしてASPに参加し、1963年ザンジバル島に渡った。
- 9) ムフスィン・アル=キンディーの著作[al-Kindī 2009]はザンジバルで発行された新聞の分析で、ハリス・ガッサニーの著作は[Ghassany 2010]は1964年のザンジバル革命時に、加害者側(アフリカ人)へのインタビューにもとづいた研究で本稿の対象からずれるため、ここでは扱わないこととする。またこれ以前に出版されたザンジバルの歴史書にはオマーン人の歴史家サイード・アル=ムガイリーによる重要な研究[al-Mughayrī 1979]もあるが、1950年代に書かれ、革命前の1962年には脱稿しているため、今回の分析からは除外した。このほかにも数は少ないがオマーン人による歴史書[Al-Maamiry 1979]や自伝[Said-Reute 1888]が存在する。
- 10) 第二版には、オマーン人の重要人物を2人追加するなど加筆修正が施されている。英語版は第二版の翻訳だが、その段階でも小見出しのタイトルや章の配置が大幅に変更されている。あいにくアラビア語初版本は入手することができなかったため、本稿ではアラビア語第二版をベースに使っているが、英語版にしかない記述も必要に応じて引用した。
- 11) 以下、アル=リヤーミーの同書からの引用については( )内にページ数のみ提示する。
- 12) 「アラブの土地だ」という文言は、英語版では削除されているが、アラビア語版には、「ザンジバルはアラブの土地だ!!」とか「誰がザンジバルに最初に住んだのか——アラブ人かシラジ人か」という小見出しもある。
- 13) 英語版では「オマーン人」がすべて「アラブ人」に修正されている[Al Riyami 2012: 60]。
- 14) たとえば、2012年に自伝を出版したサウード・アル=ブーサイディーは、民族ごとに島を統治したイギリスを批判して以下のように述べている。「もしイギリス政府がザンジバル国民という概念を導入してくれていたら、みなアイデンティティと国家への忠誠心をもてただろうし、多くの問題も回避できて、ザンジバル政府の強化につながっただろう」[Al Busaidi 2012: 127-129]。1919年ザンジバルで生まれた彼は、オックスフォード大学卒業後、ザンジバルの中心地ストーンタウンで地区長官(District Commissioner)を務めた人物である。革命後投獄されたが、71年にオマーンに移住、外交官として活躍した。
- 15) 彼はアラビア語があまり話せないため、インタビューは英語でおこなわれた。
- 16) 以下、インタビューの日付を[ ]内に記す。
- 17) 1999年に自費出版されたこの本はもともとスワヒリ語で書かれたが、2012年にアラビア語訳が出版された。著者は1926年にザンジバルで生まれ、高校卒業後、政府役人として働いていた。イギリス統治時代、ケンブリッジ大学に2年間留学も果たすなど、有力一族の出身である。
- 18) 先に挙げたアル=リヤーミーも同じ写真を掲載しているのだが、別の文脈で用いている。彼は公立学校でアラブ人が少数派だったことに対して、イギリス政府の教育政策では従来のアラビア語やイスラーム教育がカリキュラムから削除されたので、アラブ人は政府が提供する世俗学校ではなく、マドラサと呼ばれるコーラン学校か、国外への留学を希望していたというものである[al-Riyāmī 2009; 大川 2011]。

- 19) 実名で本を出版しているこれまでの登場人物とは別で、インタビューのみ言及するオーマン人に関しては仮名とする。

## 参考文献

- Al Barwani, Ali M.  
1997 *Conflict and Harmony in Zanzibar (Memoirs)*. Author's edition.
- al-Barwānī, 'Alī M.  
2011 *Al-Širā'āt wa al-wi'ām fī Zinjibār: Dhikriyāt 'Alī bin Muḥsin al-Barwānī*. (al-tarjama, A. D. al-Sayyid 'Umar), Maktabat Bayrūt. (上掲書アラビア語翻訳)
- Bennett, Norman R.  
1986 *Arab versus European: Diplomacy and War in Nineteenth-Century East Central Africa*. Africana Publishing Company.
- Bissell, William C.  
2011 *Urban Design, Chaos, and Colonial Power in Zanzibar*. Indiana University Press.
- Burton, Richard F.  
2003(1872) *Zanzibar: City, Island, and Coast*. vol. 1 & 2, University Press of the Pacific.
- Al Busaidi, Saud A.  
2012 *Memoirs of an Omani Gentleman from Zanzibar*. Al Roya Press & Oybloishing House.
- Clayton, Anthony  
1981 *The Zanzibar Revolution and its Aftermath*. Archon Books.
- Cooper, Frederick  
1977 *Plantation Slavery on the East Coast of Africa*. Yale University Press.
- Coupland, Reginald  
1939 *The Exploitation of East Africa 1856-1890: The Slave Trade and the Scramble*. Northwestern University Press.
- Fair, Laura  
2001 *Pastimes and Politics: Culture, Community and Identity in Post-Abolition Urban Zanzibar*. Ohio University Press.
- Ghassany, Harith  
2010 *Kwaheri Ukoloni, Kwaheri Uhuru! Zanzibar Na Mapinduzi Ya Afrabia*. Lulu.com. (スワヒリ語)
- Ismaili, Issa N.  
1999 *Zanzibar: Kinyang'anyiro na Utumwa*. Author's edition. (スワヒリ語)
- Isma'īlī, 'Isā N.  
2012 *Zinjibār: al-Takālub al-isti'māliya wa tijārat al-riqq*. (al-tarjama, Mubārak Khalfān al-Sabāhī), Dubaī, Author's edition. (上掲書アラビア語翻訳)

Author's edition. (上掲書アラビア語翻訳)

al-Kindī, Muḥsin

2009 *Al-Ṣaḥāfa al-'Umāniya al-muhājira wa shakhṣiyyāthā: al-Shaykh Hāshil al-Maskarī namūdhan. (tab 'a majīda wa munaqqāha)*, Riyāḍ al-Rayyis Books.

Al-Maamiry, Ahmed H.

1979 *Oman and East Africa*. Lancers Publishers.

al-Mughayrī, Sa'īd A.

1979 *Juḥayna al-Akḥbār fī Ta' rīkh Zinjibār* Wizāra al-Turāth al-Qawmī wa al-Thaqāfa, Saṭṭana 'Umān.

Pouwels, Randall L.

1987 *Horn and Crescent: Cultural Change and Traditional Islam on the East African Coast, 800-1900*. Cambridge University Press.

al-Riyāmī, Nāṣir M.

2009 *Zinjibār: Shakhṣiyyāt wa aḥdāth 1828-1972. (al-tab 'a al-thāniya)*, Maktabat Bayrūt.

Al Riyami, Nasser M.

2012 *Zanzibar: Personalities & Events (1828-1972)*. translated by Ali Rashid Al Abri, Beirut Bookshop. (上記英語翻訳)

Said-Reute, Emily

1981(1888) *Memoirs of an Arabian Princess*. East-West Publications.

Sheriff, Abdul

1995 An Outline History of Zanzibar Stone Town. in Sheriff, A. (ed.) *The History and Conservation of Zanzibar Stone Town*. The Department of Archives, Museums and Antiquities in association with James Currey and Ohio University Press, pp. 8-29.

Stoler, Ann L. & Frederick Cooper

1998 Between Metropole and Colony: Rethinking a Research Agenda. in Cooper, F. & A. L. Stoler (eds.) *Tensions of Empire: Colonial Cultures in a Bourgeois World*. University of California Press, pp. 1-56.

大川 真由子

2008 「奴隷言説の現在——ザンジバルにおける奴隷制とアフリカ系オーマン人の歴史認識」『アジア・アフリカ言語文化研究』75 : 63-95.

2010 『帰還移民の人類学——アフリカ系オーマン人のエスニック・アイデンティティ』明石書店。

2011 「植民地期東アフリカにおけるアラブ性とアラビア語——エリート・オーマン移民の苦悩と挑戦」『歴史学研究』873 : 61-73.

菊地 暁

2003 「帝国の『不在』——日本の植民地人類学をめぐる覚書」山本有造(編)、『帝国の研究——原理・類型・関係』名古屋大学出版会、pp. 357-386

キャナダイン、デヴィッド

2004 『虚飾の帝国——オリエンタリズムからオーナメンタリズムへ』平田雅博・細川道久訳、日本経



栗本 英世・井野瀬 久美恵（編）

1999 『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院。

ストーラー、A. L.

2010 『肉体の知識と帝国の権力——人種と植民地支配における親密なるもの』永渕康之ほか訳、以文社。

平田 雅博

2005 「新しい帝国史とは何か」歴史学研究会（編）『帝国への新たな視座——歴史研究の地平から』青木書店、pp. 179-215。